

特別展 花・flower・華 2024

—奥村土牛の桜・福田平八郎の牡丹・梅原龍三郎のばら—

山種美術館 24.03.09～05.06



奥村土牛 《醍醐》 1972年 紙本・彩色

京都・総本山醍醐寺の樹齢約170年とされる名木をモデルとした作品で、絵具を何層に塗り重ねることで、生まれた柔らかな色合いは春の陽気を感じさせる名品である。

綿えんじと胡粉による日本画特有の美しい発色を見せる薄紅色の桜は、春らしい叙情的な雰囲気画面一杯に醸し出していて、若々しさが溢れる素晴らしい作品である。

この時期、四季折々に咲きこぼれる「花々」は、古くから日本人の心を魅了し愛されてきて、画家たちにとっても「花」は魅力的なモチーフであり、現在にいたるまでそれぞれの個性が発揮された「傑作な作品」が数多く作成されている。

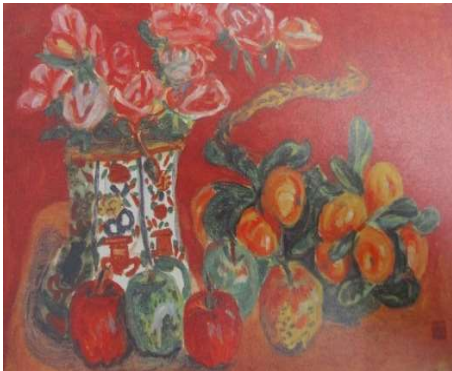
福田平八郎 《牡丹》 1924年 絹本・彩色・屏風



画伯の作品の特徴は、鋭い観察眼を基にしたもので、本作は、満開の咲き誇る「牡丹」の木々を大ぶりに描いた画伯初期の作品である。

器に盛られた静物画の「牡丹の額絵」は、花びらの繊細な質感や柔らかな色あいで再現されて、まるで夢を見ているかのような幽玄な世界が生みだされている。

梅原龍三郎 《薔薇と蜜柑》 1944年 紙本 油彩/額



画伯は、花の静物画（特にばら）を数多く描いているのは、彩り美しい花は、“見逃す筈のないモチーフであったためである”とされる。

本作は萬歴（ばんれき）赤絵の壺に薔薇を生け、色鮮やかなリンゴや枝葉のついた蜜柑を添えた画伯の色彩が光るもので、“薔薇の美しさは長くもたないため、常に短時間で仕上げた”とされている。